

校長室から

第16号

二宮金次郎の像について ~その8~

本校の金次郎像の寄贈者齋藤健二郎（複数の文献では健次郎）氏は、本校保護者会の第2代会長（昭和3～9年）を務められた方で、西興部村『西興部村誌』（1935年）には本村の功労者として写真と経歴が掲載されています。

さて、金次郎像の建設費一千元は、当時どれくらいの価値があったのでしょうか。

昭和15年10月、国家総動員法に基づく会社経理統制令が公布、施行され「サラリーマンの給料」にも給与統制が行われました。月給は、大学令による大学卒業生（当時の大学進学率は約1%と推定される）技術者85円、事務者75円、尋常小学校卒業生21円でした。軍人では、中尉2級の年俵がちょうど1020円でした。物価はというと、白米10kg2円89銭、そば9銭、たばこ（ゴールデンバット）が9銭の時代でした。

話を金次郎像に戻します。下から仰ぎ見る金次郎は、しっかりと本を読んでいます。表紙に「大学」の二文字をはっきりと見ることができます。

『大学』（だいがく）とは儒教の経書の一つ。南宋以降、『中庸』『論語』『孟子』と合わせて四書とされた。もともとは『礼記』の一篇であり、曾子に作られたとも秦漢の儒家によって作られたとも言われ「内容は「朱子学において自己修養から始めて多くの人を救済する政治へと段階的に発展していく儒者にとっての基本綱領が示されている」、当時の知識人・教養人の必読の書です。



本の表紙の字が見えたら、中身をのぞきたくなるのが人情というものです。筆者は高い所が大の苦手ではありますが、脚立に上り、本をのぞきました。（よい子の皆さんは絶対にまねしないでください）漢文が書かれています。



「一家仁 一國興仁 一家讓 一國興讓 一人貪戾 一國作亂 其機如此 此謂一言僨事 一人定國」

（いっかじんなれば、いっこくじんにおこり、いっかじょうなれば、いっこくじょうにおこり、いちにんたんれいなれば、いっこくらんをなす。そのきかくのごとし。いちげんことをやぶり、いちにんくにをさだむ）です。意味は「長を務める人に思いやり

があれば 国中に思いやりができ、長を務める人に譲り合う気持ちがあれば 国中に譲り合う心が起こる。一人でも心貧しい人が居れば国中が乱れてしまう。」というリーダー論が一般的なようですが、「一家（家族）が思いやりの心を持てば、国全体にも思いやりの心が興り、一家が譲り合う気持ちを持てば、国全体も同じようになる。一家が貧欲になれば、その国は乱れることになる。」という解釈もあります。14歳のときにこの文章の意味を理解していれば、どんな人生を歩んでいたのだろう、とってしまう55歳の筆者です。